

郷土に誇りと愛着を持つ子どもを育てる 教員の育成に関する一考察 - 山口県の文化財（有形文化財）の魅力に 注目した「郷土史」の授業を通して -

河合良房

A Study on Development of Teachers who Bring up Children with Attachment and Pride in their Hometown in Mind - Through Classes of 'Local History' Paying Attention to Charms of Cultural Properties (Tangible Properties) of Yamaguchi Prefecture -

Yoshifusa Kawai

1. はじめに

子どもたちを地域文化の継承と創造の担い手として育成するには、平成29年改訂の学習指導要領¹⁾が示す「社会に開かれた教育課程」を重視し、「確かな学力」や「豊かな心」、「健やかな体」の育成をめざした教育活動が基礎となる。その中でも教師の果たす役割は大きい。

小学校社会科の地域学習では、従来から各自治体が地域教材を編集した副読本に沿って授業が進められている。しかし、教師自ら地域社会での史跡巡りや資料調査を行って教材を作成する機会は、ほとんどなくなりつつあるのではないかと危惧している。テキストをただ読んで児童に聞かせるだけでは、子どもたちに地域の魅力は伝わらない。子どもたちが生活の場を通して社会認識を深め、郷土に誇りと愛着を持ち、グローバルな視点で社会に参画するようになるためには、社会科としてのものの見方・考え方を授け、地元の魅力を語ることのできる教師の存在が必要だと考える。

これまで、地域の伝統・文化や先人のはたらきに焦点をあてた研究として、信田（2020）、新宮ら（2023）、六本木ら（2019）など数多くある。

信田（2020）は奈良市（「古都奈良の文化財」）を事例に、ESDをテーマにした総合的な学習の時間の実践から、世界遺産学習を小学校社会科において実施することで系統性のある指導を行うことができるのではないかと考え、その方途を提示した。

新宮ら（2023）は、教科書の学習内容の検討をもとにして単元「東大寺の大仏が語る SDGs」を開発実施し、学習指導要領前文と解説に新たに加えられた、持続可能な社会づくりを担おうとする態度を養うことも視野に入れた小学校におけるESD社会科を提案した。

六本木ら（2019）は、博物館と学校の博学連携による人材育成に注目している。地域教材の開発・活用を課題として取り組んだ教員養成の実践分析を通して、小学校の地域の伝統や文化を学習する際に、文化財をいかなる視点で教材活用すべきか、博学連携を推進するための方向性と人材養成について、学校教育の側からの提言を行っている。

本稿では、教職課程を開設しているA大学の教養科目「郷土史」において、山口県の文化財（有

形文化財)に焦点をあて、どうすれば、将来教師をめざす学生が地域の魅力を語り、子どもたちに郷土に誇りと愛着を持たせることができる人材となるかについて考察したい。文化庁によれば、文化財と一口にいてもその種類は多い²⁾。昭和24年に焼損した法隆寺金堂壁画の件をきっかけに制定された現在の文化財保護法(昭和25年制定)には、その目的を、「文化財を保存し、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献すること(第1条)」とする。また、その定義として「文化財」とは「有形文化財」「無形文化財」「民俗文化財」「記念物(史跡・名勝・天然記念物)」「文化的景観」「伝統的建造物群」の6類型をいい(第2条)、文部科学大臣が重要なものを「重要文化財」等に指定する、としている。

対象の授業は、筆者が担当したA大学教育学部1年開設科目「郷土史」(38名受講)全15回×90分である。

考察の手順としては、まず、「郷土史」受講生の特性について示す。続いて、その特性をふまえた重点項目3点について論じる。そして、学生による文化財紹介の取組を分析し、学生の気づきについて考察する。以上をふまえ教職課程における「郷土史」の意義・展望を示す。

2. 開設科目「郷土史」の構成

現在、本学では卒業生の多くが山口県内の公立小学校教諭として社会に出ていく。「令和6年度山口県教育推進の手引き(山口県教育委員会)」³⁾によると、教育目標として「未来を拓くたくましい「やまぐちっ子」の育成」を掲げ、そのすがたとして次の3つをあげている。

- 1) 高い志をもち、未来に向かって挑戦し続ける人
- 2) 知・徳・体の調和がとれた生きる力を身に付けるとともに、他者と協働しながら力強く生きていく人
- 3) 郷土に誇りと愛着をもち、グローバルな視点で社会に参画する人

この3)の部分に深く関連する科目として、A大学教育学部1年後期に開設する「郷土史」(2単位)において、山口県内の建造物(有形文化財)や重要伝統的建造物群保存地区などを中心に学んでいる。

この授業では、文化財を中心に、郷土の歴史や文化、自然などについて学び、各自設定したテーマで調査・研究を行う。また、課題レポート及びプレゼンテーション資料を作成し、調査研究の成果を自分の言葉で伝える表現方法を修得するとともに、発表を相互に評価し合うことで、学び合う姿勢や評価能力を高めながら、文化財を教材化する上でのポイントについて考えることとしている。そして到達目標を次の5つとしている。

- (1) 文化財を通して郷土に誇りと愛着を持てる。
- (2) 山口県の歴史や文化について理解を深め、自分の言葉で郷土について語るができる。
- (3) 調査、研究の成果を資料にまとめて発表するとともに、互いに発表を評価し合うことでブラッシュアップできる。
- (4) 文化財を中心とした地域資源を生かして、地域の活性化に取り組む意欲を高める。
- (5) 郷土の文化財を教材として活用する視点を持つことができる。

3. 受講生の特性

2024年度入学1年教育学部のうち、男11人、女27人を対象に、2024年9月24日第1回「郷土史」の授業でアンケートを行った。「『あなたの郷土(ふるさと)の歴史』に関して、何か知っている

ものがあればあげてください。(エリア名も併記してください)」と問うた。回答は37名であった。学生の郷土(エリア名)については以下の通り(数字は人数)である。

山口県34 (山口市7、宇部市7、下関市4、山陽小野田市4、防府市3、周南市2、下松市2、長門市2、萩市1、光市1、田布施町1)
県外3 (鳥取県米子市1、佐賀県佐賀市1、鹿児島県1)

学生が郷土の歴史について知っているものとしてあげたのは以下の通りである(県内・県外順不同)。

毛利庭園3、	三本の矢3、	石炭記念館3、	ふぐ(ふく)3、
瑠璃光寺五重塔2、	防府天満宮2、	セメントの町2、	きつねの嫁入り2、
反射炉1、	土井ヶ浜遺跡1、	春帆楼1、	忌宮神社1、
数方庭祭1、	萩高校周りの白壁1	壇ノ浦1、	通のくじら祭1、
楊貴妃の里1、	長生炭鉱跡地1、	山口城1、	松田屋旅館1、
周布政之助1、	児玉源太郎1、	鑄銭司1、	サビエル1、
村田清風1、	大村益次郎1、	伊藤博文1、	乃木希典1、
金子みすず1、	渡辺祐策1、	まどみちを1、	カンロ工場1、
バルーンフェスタ1、	三年寝太郎1、	寝太郎堰1、	やきとり発祥地1、
大内城跡1、	明治維新(防府)1、	空襲1、	ポンプ場1、
一の坂川1、	龍毎1、	ういろう1、	かわらそば1、
ゆうれい寿司1、	安倍元首相の地元1、	天然記念物(エヒメアヤメ)1	

全体的にはばらつきがあるという印象である。この結果については学修の推移と合わせて後に合わせて検討したい。

次に、「高校生の時に授業を受けた社会科の科目名に○をつけてください。(複数可)」と問うた。結果は以下の通りである。

(2) 歴史総合	(0) 日本史探究	(0) 世界史探究
(1) 地理総合	(1) 地理探究	
(10) 日本史A	(19) 日本史B	
(20) 世界史A	(15) 世界史B	
(6) 地理 A	(10) 地理 B	
(4) 公共	(16) 倫理	(22) 政治・経済
(8) その他	科目名 (現代社会7、公民1)	

これを見ると、「世界史」に比べて「日本史」の履修者が少なく、「地理」の履修者はさらに少ないことがわかる。なお、履修者数がもっとも多かったのは「政治・経済」であった。後で述べるが、社会科嫌いを増やしている要因の一つに「地理(特に地図)」が頭に入っていないことがあげられるのではないかと個人的には感じている。なぜなら、歴史や政治・経済などを学ぶ際に、それが日本の(あるいは世界の)どの地域のことを扱っているかがわからなければ、理解することは至難の業であるからである。(筆者はかつて高校に入学してきた生徒がロンドンとパリの位置を逆に覚えていて仰天した。)

また、「社会科の得意分野・苦手分野があればそれぞれ理由も添えて記入してください。」と問うた。小学校社会科から高等学校地歴公民科までのイメージについての質問である。回答は37名であり、得意分野については以下の通りである。() は人数である。

都道府県の名物、土地の特性、文化史、日本史 (6)、第1次世界大戦から (以降)、政治・経済、1800年以降の近代の歴史 (世界史) (3)、世界史 (2)、平安・戦国・大正の歴史、革命、地理 (世界の建物)、地理 (3)、身近な場所の歴史、歴史の流れ・事件、古代の世界史、建物について、歴史 (2)、政治、倫理

理由 (得意・興味) については以下のような回答があった。

- ・ただ暗記するよりも考える内容が多いものが好き。
- ・文化史は華やかなものが多くて魅力的だから。
- ・昔のことを知ることが面白い。
- ・昔のことを知ることができることがおもしろい。
- ・陰陽師が小学生の頃から好きで、戦国は武将や姫が好きで、大正はモダンが好きだから。
- ・ガラッと状況が変わって面白いから印象深く覚えてられる (革命)。
- ・地図を見ながら学ぶ近代史が好みであるため。
- ・自分の知らない日本のことを知ることができるから。
- ・単純に面白い。日本の歴史は謎が多いから。特に古代が好き。
- ・世界史に出てくるカタカナで書かれた複雑な名前を覚えるのが好きだから。
- ・歴史の重要人物の偉業を追えるのが楽しいから。
- ・高校の時、先生の歴史の豆知識が好きだった。
- ・様々な人の物の捉え方を知ることができるから (倫理)。

苦手分野については以下のようになった。括弧内は人数である。

歴史 (6)、歴史上の人物の名前や年代 (5)、世界史 (11)、日本史 (7)、政治・経済 (5)、平安時代、社会全部 (2)、地理 (2)、古代世界史 (オリエン特等) (2)、地名や県名、世界史 (中世、近世)、社会全般

苦手なことについての理由では以下の回答が見られた。

- ・時系列がよく分からない。
- ・人物や出来事が覚えられない (18)。
- ・名前が覚えにくいのとどの国で起こったことがわからなくなる。
- ・日本のことは興味深い、世界のことはカタカナが多くて苦手 (5)。
- ・同じ家の名前が多すぎる (平安時代)。
- ・熟語みたいな言葉が多くて難しい (政治)。
- ・似た名前が多すぎるから苦手。
- ・法則性のない丸暗記スタイルなことが苦痛です。
- ・日本史は高校1年までしか習っていない。
- ・仕組みが複雑で覚えにくいから (政治・経済)。

- ・時代背景やストーリーと人物が結びつかない。
- ・政治に興味がないため（政治・経済）。

得意・不得意それぞれ理由があるが、社会科が苦手という学生の多くは、「暗記するのが苦手」と回答している者が多い。逆に、「ストーリー性があると覚えられる」という意見も見られた。最初の授業で行ったこのアンケートを元に、どこに社会科が苦手になる要因があるのか、考えてその後の授業に生かすことにした。

4. 重点項目の整理および授業の展開

「郷土史」の授業では、初回の授業でのアンケートをもとに、次の3点に留意しながら授業を進めた。

第一に、地理的な苦手を克服することである。このことについては山口県の白地図を用いながら、市町の確認を行った（第2回：空間軸で捉えた山口県）。県外からの学生もいるため、一つひとつ丁寧に確認作業を行った。県内出身の学生も、意外と防府市の場所を示すことができなかつたり、県東部（下松市、光市、田布施町、平生町、上関町、柳井市、岩国市、和木町、大島郡）や阿武町の場所が曖昧であったりする者が少なくなかったので、効果があった。4人ずつのグループワークでは、（1）地形の特徴（山地、平野、主な河川ほか）（2）気候の特徴（年平均気温、降水量ほか）（3）人口の特徴（県全体、各都市、増減ほか）（4）産業の特徴（主な産業や企業、特産品ほか）をそれぞれが調べ、班内で発表してデータの共有を図った。また、文化財の所在地を地図上で確認するため、県庁の県観光スポーツ文化部文化振興課に依頼して、山口県の観光マップを10部いただき、4人ずつのグループワークの中で、各文化財がどの市町にあるか、マークする作業も後に行った。

第二に、時系列で歴史を再整理することである。このことについては、歴史上のできごとを正確な年で言い当てることはせず、太古から現代までを大まかな時代区分で見ることと、100年単位（世紀）での整理をすることを心がけた。すなわち、①先史（大和時代以前）⇒②古代（大和時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代）⇒③中世（鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、戦国時代、安土桃山時代）⇒④近世（江戸時代～明治維新）⇒⑤近代（明治維新～第二次世界大戦）⇒⑥現代（第二次世界大戦後～）といった大きなくくりと順序をまず把握して、それから100年単位の歴史観を身につけることをめざした。例えば、壇ノ浦の戦い（1185年）は12C後半で古代から中世への転換期であるとか、明治維新（鳥羽伏見の戦い）（1868年）は19C後半で近世から近代への転換期であるといった具合である。そうすることで、世界の歴史との関係が見えやすくなる。

第三に、地元の歴史に焦点を当て、歴史を身近にたぐり寄せることである。このことについては、学生それぞれの調査・研究・発表のテーマが各自のふるさとにまつわるものが多かったので、一定の成果を得ることができたが、それとは別に、第8回では特別講師として、毛利家の菩提寺であり、国指定の重要文化財の山門などのある、山口市の洞春寺の深野宗泉住職を大学に招き、講義をお願いした。飛鳥時代から現代に至るまでの日本における仏教受容変化の概略を述べながら、洞春寺に残る大内氏の文化遺産、毛利元就の菩提寺としての役割、幕末から明治維新时期における寺の立ち位置の転換、井上馨（長州ファイブの一人、山口市湯田生まれの初代外務大臣）が後押しした仏教福祉、現代から未来へ、といった特別講義「洞春寺から見える日本仏教史」を1時間していただき、ふるさとの歴史を身近にたぐり寄せる貴重な経験をさせていただいた（写真1）。

学生からは、「高校の授業とは違って日本の仏教について深く知ることができた。」「山口市に住んでいるがこのような場所があることを知らなかった。」「地元の貴重な文化財として、ぜひこ

れからも残していきたい。」など多くの感想が寄せられ、中には、講義の翌日に洞春寺を実際に訪問する者も何人かあり、自分事として捉えた学生が多く、関心の高さを知ることができた。



写真1：洞春寺深野住職の特別講義

そのほか授業では、山口県の国宝（第4回）、山口県の重要文化財Ⅰ（建築物）（第5回）、山口県の重要文化財Ⅱ（絵画・彫刻・工芸品）（第6回）、山口県の史跡・名勝（第7回）、山口県の特別天然記念物・重要民俗文化財（第9回）、山口県の間人国宝（第10回）、山口県の重要伝統的建造物群保存地区（第11回）、山口県の登録文化財（第12回）を取り上げた。

具体的には、建造物では、国宝である瑠璃光寺五重塔（山口市）や住吉神社本殿（下関市）、功山寺仏殿（下関市）、重要文化財として菊屋家住宅（萩市）、旧毛利家本邸（防府市）、周防国分寺金堂（防府市）のほか、角島灯台（下関市）や旧下関英国領事館（下関市）など観光名所としても有名なものを提示した。また、重要伝統的建造物群保存地区については、萩市堀内地区伝統的建造物群保存地区、萩市平安古地区伝統的建造物群保存地区、萩市浜崎伝統的建造物群保存地区、萩市佐々並市伝統的建造物群保存地区および柳井市古市金屋伝統的建造物群保存地区の5つを紹介した。

毎回の課題レポートの作成のほか、授業ではペアワークやグループワーク、各班単位での意見交換などを実施して、各自の意見の相違点や共通点を明らかにしながら、他者の視点を新鮮なものとして捉え、そこからまた、新しい発見や考え方を巡らせることに留意しながら授業を進めていった。学生からは、自分以外の方が同じ文化財を見ても、それぞれ感じ方や捉え方が全然違うことに驚いたり、また、同じ意見を持つ人がいると非常に共感できる楽しさもあったりといった意見が寄せられた。これらの意見からは、みんなで学ぶ楽しさがあることを見て取ることができる。

5. 授業の後半、学生による文化財紹介

さて、第13、14回の授業では、学生による調査・研究及びその発表を行った。テーマについては県内の（あるいは出身地の県の）文化財について自由にテーマを設定させた（表1）。その内訳は歴史的建造物や史跡に集中し、掛け軸や刀剣、天然記念物はわずかであった。これは、学生の興味・関心が授業で多くの時間を割いた建造物や史跡に集中した結果ではないかと推察する。

表1 学生による調査・研究・発表テーマ

ジャンル及び発表テーマ	
■国宝	「瑠璃光寺五重塔について（3名）」、「松本城天守について」、「霧島神宮について」、「刀 金象嵌銘天正十三二月日 江本阿弥磨上之（花押）について」、「太刀 銘為次（狐が崎）について」
■建造物（県内）	「旧毛利家本邸について（2名）」、「宇部市渡辺翁記念会館について（2名）」、「角島灯台について」、「旧小野田セメント堅窯について」、「八坂神社本殿について」、「花岡八幡宮について」、「小鯖八幡宮（鰐鳴八幡宮）について」、「乗福寺について」、「赤間神宮水天門について」、「旧下関英国領事館について」、「吉香神社について」、「旧伊藤博文邸ほかについて」、「二尊院五輪塔について」
■建造物（県外）	「鳥取東照宮（樗谿神社）・樗谿公園について」
■史跡（県内）	「大村益次郎墓について（2名）」、「萩反射炉について」、「霜降城跡について」、「下松市天王森古墳について」、「高泊開作浜五挺唐樋について」「潮音洞について」
■史跡（県外）	「吉野ヶ里遺跡について」
■名勝	「錦帯橋について」
■絵画・古文書	「紙本著色毛利元就像」、「松嶽山正法寺文書について」
■工芸品（刀剣）	「太刀 銘備州長船盛光について」、「刀 銘・虎徹について」
■天然記念物など	「エヒメアヤメについて」、「秋吉台グリーンカルスト街道について」

学生による文化財の発表については、人数と時間の制約から1人2分間で行うこととし、19人ずつ2週に分けて発表した。事前に発表用原稿を提出させ、適宜助言をして分かりやすい内容へ推敲を重ねた。ここでは、次の2点を必ず原稿に反映するように伝えた。一つは「なぜ、この文化財を選んだのか、その理由を明示する」こと。もう一つは「この文化財のすごいところ（魅力）について語ること」とした。また、使用する写真を原則1枚とし、パワーポイントを用いて、プロジェクターで拡大してスクリーンに投影した。そのため、事前の提出の際に、ピントがぼやけているものについては再提出させ、見る者にわかりやすい資料となるように準備させた。（写真2）発表を聞く側は、それぞれの発表に対し、以下の4点について、一人ずつ発表した直後に2分程度で記録（評価・感想など）をとるようにした。

- ① 発表内容は分かりやすかったか。
- ② 発表を聞いて、以前より知識や考えが深まったか。
- ③ 発表の良かった点と改善点を1つずつあげてみよう。
- ④ 質問を1つ、書いてみよう。

①と②については、（3：十分そう思う、2：まあまあ、1：分かりにくい、または、深まらなかった）の中から選び、3～1の数字で回答し、③と④は自由記述とした。発表は6人、7人、6人ずつを1まとまりとして5分ずつ休憩をとりながら実施した。



写真2：学生による発表の様子

学生による評価、①発表内容は分かりやすかったか、②発表を聞いて以前より知識や考え方が深まったか、については全員が3点満点中、2点台後半であった。このことから、全体的に有意義な学修となったと言える。

学生による評価（③発表の良かった点）をいくつか以下に示す。

- ・「みんな堂々とした発表だったので、自分の発表の参考にしたい。また、2分間の発表時間にも関わらず詳しく説明して魅力を伝えていたのがすごかった。」
- ・「実際に行ったこと、見たことがあるものから、今まで知らなかったものまで様々な発表があり、聞いていて面白かった。」
- ・「山口県だけでなく、鳥取県や鹿児島県などの文化財も知ることができたので、とても有意義であったと思う。」
- ・「〇〇さんが取り上げていた文化財が最も気になったので行ってみたい。」
- ・「実際にその場所を訪れて感じたことをエピソードとして発表に取り入れるだけで説得力が増すのだと思った。」
- ・「『この文化財のすごい所は2つあります。』といった言葉を使うことで、話がとても分かりやすくなり、良いと思った。」
- ・「同じ発表テーマでも魅力の捉え方が違って聞いていて面白かった。」
- ・「写真を複数提示した人や、黒板を使ったり、大きさを両手で示したりした人もいて、分かりやすく伝える工夫をしていた。」
- ・「話し方が一本調子にならず、声の強弱や抑揚をつけて聞きやすかった。」

全体的に、発表を聞いていて楽しかったと回答した者が多く、また、それぞれの発表の良かった所を積極的に捉えており、これを自らの発表の励みにした者や、これを見て自分自身に自信を持った学生も多かったようである。

学生による評価（③発表の改善点）のうち改善的な視点を含むものをいくつか示す。

- ・「もう少し、大きな声ではきはきと発表するともっと良くなると思う。」
- ・「発表用の原稿やスマートフォンばかり見ていたので、もう少しみんなの方を見て話すと良かった。」
- ・「難しい単語が多かったので、もう少し分かりやすく説明があると良かった。」
- ・「パワーポイントの文字が少し小さかったので、もう少し大きいと読みやすい。」

- ・「漢字の読みで詰まってしまうので、読みの練習をしておいた方が良かった。」
- ・「もう1枚、写真資料があると良かった。」
- ・「緊張のためか、少し早口で聞き取りにくかった。」
- ・「言葉が話し言葉になった部分があった。」
- ・「伝えたいことが多過ぎて、まとまりがなかったような気がする。」
- ・「話すペースがもう少しゆっくりでも良かった。」

多くの学生が2分間の発表ではあったが、緊張のためか発表用原稿から目が離せず、下を向きがちであったため、もう少し聞いている人の顔を見て発表すると良いとの意見が半数近くあった。また、マイクを用いて発表したものの、これも緊張のためか自信がないのか、声が小さかったり、早口であったりといった指摘も2～3割程度あった。パワーポイントを用いたプレゼンテーションについては、まだまだ回数を重ねていかないと人前に出て恥ずかしいでは、授業の実施が心配されるところだが、そこはまだ1年生、今後に期待したい。ただ、はじめに示した①なぜこれを選んだのか理由を話す、と②この文化財の魅力（すごいところ）はどこか、については事前の原稿作成を指導したため、一定の成果を得ることができた。

自由記述の③改善点及び④質問では、かなりつっこんだ意見もあり、ショックを受ける者もあるかもしれないが、誹謗・中傷は書かないことを予め伝えており、これはあくまでもお互いのブラッシュアップのための意見なので、参考程度でこれが絶対正しいと鵜呑みにしないように指導している。どのような力がつき、どの力をこれから伸ばしていくのか、それぞれが自分の良さと未熟な点に気付き、それを自覚して、次に進んでほしいものである。

そのために、今回の学生の発表では、Teamsを利用して、パワーポイントの画面と発表者の音声と同時に録音して、後から自分の発表の音声を文字起こしの文章と合わせて一定期間内であれば何度でも再生可能な記録を取り、学生全員にフィードバックしている。学生による評価①～④についても、集計結果を一人ずつの記録にまとめて配付した。それを基にして学生には、教材研究の入門、視聴覚機材の開発と活用等を含む振り返りを行った。

6. おわりに

「郷土史」の授業で明らかになったところをいくつか述べたい。

全体的に学生たちは熱心に取り組んでおり、本授業を通して地域に対する関心、地域の一員としての誇りと愛着を深めることができたと考えている。このことは学習指導要領に記載されている小学校社会科にも関連する。小学校社会科の目標には「地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚」という記載がある。本研究は小学校社会科の指導に有益な示唆を与えると考えられる。本研究が示していることを二つにまとめてみたい。

第一は、学生たちが身近で、親近感のある文化財に目を向けた点である。本授業では、もともと身近に感じていたことを、授業によって膨らませた。学生たちは調査・研究・発表を通じて自分の住む地域を再確認、再発見していったようである。また外部から講師を招いてお話をいただいたことから、地元であるが遠く感じていた文化財の存在をいっそう身近に感じたと考えられる。

学生の最後の発表に際しては、はじめのアンケートで回答した地元の歴史に関することから（文化財）を発表テーマに選んだ者が多かった。その理由が、「地元のことを今回のことで深く知りたいと思ったから」との回答が大半を占めていた。学生たちは自分の身近なところから学びを深めていこうとしていたのである。

また、特別講義を聞いた学生の何人かが、翌日には洞春寺を尋ねたようである。その行動力をほめ、興味・関心を持ったら今のうちに「あるく・見る・きく」を実践すると良いと学生に伝え

ている。そのことにより、新たな他人との出会いや自分との新しい出会いといった、新しい発見があるとこれからも伝えていきたい。何の変哲もなく、「当たり前」だと思い接してきたふるさとの歴史や文化に再度光を当てる意味で、文化財を活用しそれを改めて自分事としてたぐり寄せる行為（学び）が、郷土の誇りや愛着につながる。ここに、教職課程における「郷土史」の意義があるといえる。

第二は、授業中でのプレゼンテーションである。学生たちが自ら調べ考えたことを人に伝えるという機会は、誇りと愛情を形成するための重要な契機になると考えられる。今回、自分の発表する文化財を事前に訪れて写真に収め、発表に使用した学生のプレゼンテーションは、現地の雰囲気や空気、景色の様子やちょっとしたエピソードも交え、文化財の魅力をあらゆる角度から伝えようとして聞く者を魅了したものが多かった。プレゼンテーションに際しては聞き取りにくい等のコメントも見られた。どうしても難しい資料などを使うために棒読みになることもある。とはいえ、中には資料と自分の気持ちをしっかりと重ねた良いものもある。プレゼンテーションをするという前提でこそ、学生たちは自分のこととして真剣に向き合い、熱心に伝えようとした。ここにも、教職課程における「郷土史」の意義があるといえる。

今後の展開として、第15回の授業において学生が提出するレポートを分析して、「どのような力がついたのか」や「卒業までに伸ばしていきたい力」について学生がどういった実感を持ったかを明らかにして、この「郷土史」の授業がどの程度、事前に想定した目標を達成できたのかを分析して、次年度以降の授業に生かしていきたい。

本稿を書きながら実感したのは、今回授業で取り上げたり、学生が発表したりした文化財（建造物など）は、どれも形あるものとしてわれわれの目に映るものであるが、大切なのは、それらが作られた当時、どのような意志や思いがあって形になったのか、その部分を語り継いでいかないと、その価値が忘れ去られてしまうのではないかと、という思いであった。「郷土に誇りと愛着を持つ」とは、実は先人の思いを引き継ぎ、後世へ紡いでいくことにほかならないのではないかと感じた次第である。

<参考文献>

- 信田和則（2020）「世界遺産学習を小学校社会科で取り組むための一考察」『奈良佐保短期大学研究紀要』第28号、pp.39-53
- 新宮 済、中澤静男（2023）「文化財を活かした小学校におけるESD社会科創出の一方法－小学校4年生社会科「県内の文化財や年中行事」の実践から」『ESD・SDGsセンター研究紀要』奈良教育大学ESD・SDGsセンター、第1号、pp.19-29。
- 六本木健志、村田三恵（2019）「社会科地域学習における文化財の活用（後編）－副読本作成を通じた教員養成の実践から－」『教育研究所紀要』第28号、文教大学、pp.107-117。

<注釈>

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 社会編」日本文教出版、2017年、p.2。
- 2) 文化庁「文化財に関する基礎資料」平成29年11月、p.2。
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/14/pdf/r1398293_07.pdf（2025.1.10確認）
- 3) 山口県教育委員会『令和6年度山口県教育推進の手引き 未来を拓く たくましい 「やまぐちっ子」の育成』2024年、pp.1- 2。